

九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中村哲著述アーカイブ
Nakamura Tetsu Digital Archive

ダラエ・ヌールへの道：アフガン難民とともに

中村, 哲 著

あとがき、奥書

<http://hdl.handle.net/2324/4772346>

出版情報：ダラエ・ヌールへの道：アフガン難民とともに,
pp.318-323, 1993-11. 石風社

バージョン：初版、1993-11-30

権利関係：©Tetsu Nakamura printed in japan 1993

石風社より許諾を得て本文を公開しています。

公開しているPDFの印刷、複製および許可のない二次利用はおやめください。



KYUSHU UNIVERSITY

あとがき

本稿は一九八八年に出版された『ベシヤワールにて』（石風社刊）の続編として、その後の現地活動を伝えるために書かれました。一部は、既刊の『アフガニスタンの診療所から』（筑摩書房）に抜粋して掲載されています。一九八八年以後の現地事業の展開を全体的に理解できるように、とくに J A M S (Japan-Afghan Medical Service ≡ 日本-アフガン医療サービス) の出発から現在までの経緯の中で印象的な出来事や感想を拾い上げて率直に述べてみました。現地事情を伝えるのは私の身に余りますが、せめて理解の手掛かりになればと思っています。つい自分の苦勞話や日本への愚痴めいた話が多くなりましたが、現地から見るとそれはそれで真実でもありますから、前向きにご参考いただきたいと思います。

かつて日露戦争の直後、ロシアのトルストイが日本人に送った印象的なメッセージがあります。「日本人の周到をもつてして自家の使命を覚悟せず、ただ欧米の全てに腐朽せんとする皮相文明の後を追うの感あるは恨むべし。君よく聞け、ロシアにせよ日本にせよ、東洋民族には特有の

使命あり（翁はロシアを欧州に数えず）。そは人生の真義を知り、人間の真生活をなすにあり。かれ西欧諸国は器械的におのがしでかしたる所謂文明をば誇れども、それは殆ど何物にも非ず。東方の民は西人の後を追わず、自家の天地を拓かざるべからず。」（一九〇六年・徳富蘆花『巡礼紀行』）

彼は若いころロシア軍将校として、奇しくも同じアフガニスタンと一連の、中央アジアの征服戦争の中で被征服者の意外な「美德」に触れ、「文明社会の正義」に懷疑的になったといわれています。

それから一世紀も経とうとする今、このことばの引用は時代錯誤でしょうか。明治維新以来、私たちが金科玉条のごとく営々として築いてきたものの結末を前に、実に生き生きと胸をうつではありませんか。これは決して大袈裟な文明論ではありません。「アフガニスタン」で起きた悪夢をまざまざと見てきた私は、全く同様の感を深くします。

戦乱で犠牲となった二〇〇万人の死の意味を問うとき、廢墟と化した村落を眺めるとき、全世界を覆う果てしない騒乱を思うとき、万感の思いを込めて、この十年を回顧せざるを得ません。私たちが自明とするものが崩壊し、どこに行き着くか分からぬ流れの中で、心ある誰もが途方に暮れる現実が次第にあらわに姿をさらしています。そして、出される答えが断定的でスマートであればあるだけ、造花のようにきらびやかで空疎に思えます。「それは殆ど何物にも非ず」というトルストイの言葉をかみしめざるを得ません。

ベシャワール会が発足してからちょうど十年、実際、「思えば遠くへ来たもんだ」とは私たちの実感です。かつての青年医師は中年医師となり、まるで細い糸で日本と繋がる風のように、流され流されて逆に遙か日本を鳥瞰するようになった気がします。この間、世界的な激変の余波を身近に受けながら、よくも風雪に耐えて現地事業が続けられたものだと思います。十年前には想像もされなかったソビエト連邦の崩壊、イスラム世界の台頭、東欧のナショナリズムの復活と混乱、内にあっては日本の戦後・高度成長時代の総決算期——と、冷戦構造の消滅に伴う目まぐるしい「激動の時代」の開始を背景にしながらも、私たちの現地活動は何事もなかったかのように営々と続いています。

美しいヒンズークッシュの山々と同様に、私たちはこの「変わりなさ」を誇りたいと思います。「近代」という虚構が音立てて崩れ始めようとするとき、私たちは感慨を以て「我々のアフガニスタン」を思い起こすでしょう。そうして、その関わりを通して、人間に本当に必要なものはそう多くもなければ複雑でもなく、時代と所を超えてあることを知ることが出来るでしょう。この目まぐるしくも騒々しい御時勢、時流に乗って木の葉のように漂うのも、石のように沈むのも神の許される自由なら、せめて私たちは虚構の上塗りをせず、敢えて動かぬ石であり続けましょう。私たちの事業が今後も変わらず戦乱や迫害に疲れた人々の慰めとなり、現地・日本の無数の良心をあわせ、以て一隅を照らし、相互に豊かなものを分かち合えるように祈ります。それが時代に逆うドンキホーテの気概かどうかは知りません。

あとがき

最後になりましたが、目立たない所で現地事業を支えている多くの方々に言い尽くせぬ感謝を伝えると共に、この事業に協力して半ばに逝去・殉職した人々の冥福を祈り、時間の我儘を許してくれる馬場病院、稿と写真を整理するに当たって労を惜しまなかったペシヤワール会事務局、石風社に心からお礼を申し上げます。

一九九三年六月

中村
哲

＊ペシャワール会 中村医師のバキスタン・アフガニスタンでの医療活動を支援する目的で結成されたのがペシャワール会です。現在、福岡市に事務局を置いて会報の発行を通して情宣・募金活動ならびにワーカーの現地派遣等を行っております。ペシャワール会についてのお問い合わせは、左記の事務局宛にお願いいたします。年会費は、学生会員一口千円以上、一般会員一口三千円以上、維持会員一口一万円以上。

●事務局

〒810-0041

福岡市中央区大名一丁目一〇-二五 上村第二ビル六〇三号

F A R A H O U S E

電話 (〇九二) 七三一一二三七二

F A X (〇九二) 七三一一二三七三

《入会手続》

年会費を郵便振替にてご送金下さい。

口座名義 〓 ペシャワール会 郵便振替番号 〓 017901716559

中村 哲（なかむら てつ）

ペシャワール会現地代表、PMS（ペシャワール会医療サービス）総院長。

1946年福岡市生まれ。九州大学医学部卒業。国内の病院勤務を経て、1984年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来ハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。1986年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。98年には基地病院PMSをペシャワールに建設。2000年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保事業（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地1500ヶ所以上）を実践。さらに02年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、03年3月からは同全長25.5キロの用水路建設に着手、2010年3月完成。著書・編著に『ペシャワールにて』『医は国境を越えて』『医者井戸を掘る』『辺境で診る 辺境から見る』『空爆と「復興」』『丸腰のボランティア』『医者、用水路を拓く』（以上石風社）『アフガニスタンの診療所から』（ちくま文庫）などがある。

ダラエ・ヌールへの道

アフガン難民とともに

一九九三年十一月三十日初版第一刷発行
二〇一〇年五月三十日初版第五刷発行

著者 中村 哲

発行者 福元満治

発行所 石風社

福岡市中央区渡辺通二丁目三番二四号
電話〇九二（七一四）四八三八
ファクス〇九二（七二五）三三四〇

〒810-0004

印刷・製本 瞬報社写真印刷株式会社

©Tetsu Nakamura printed in Japan 1993
落丁・乱丁本はおとりかえいたしません